

食農教育の価値とは ～生きる力どう育む～

日本農業新聞 論説委員長

鈴木 祐子

四本足の鶏の話

四季

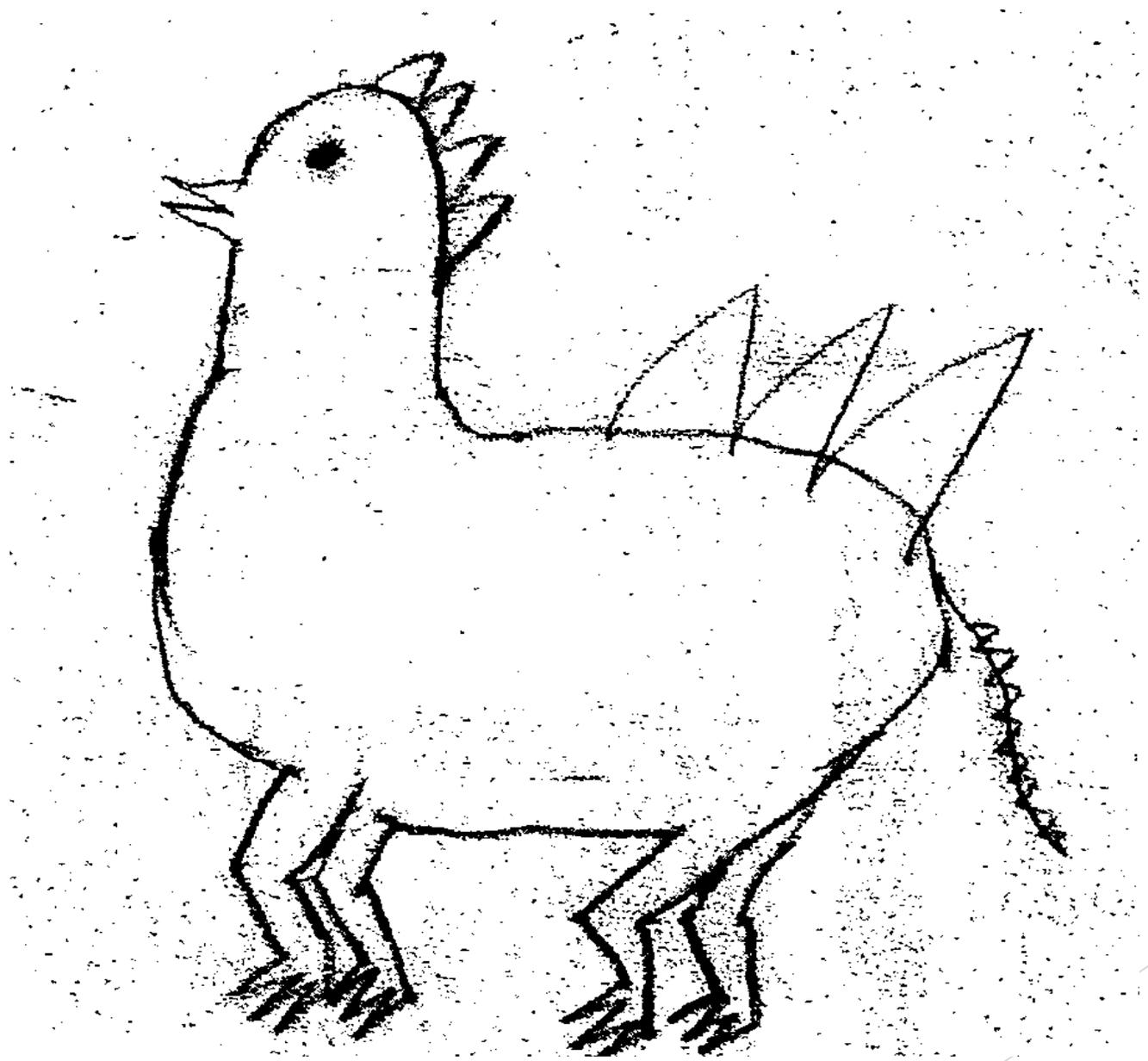
2018・11・13

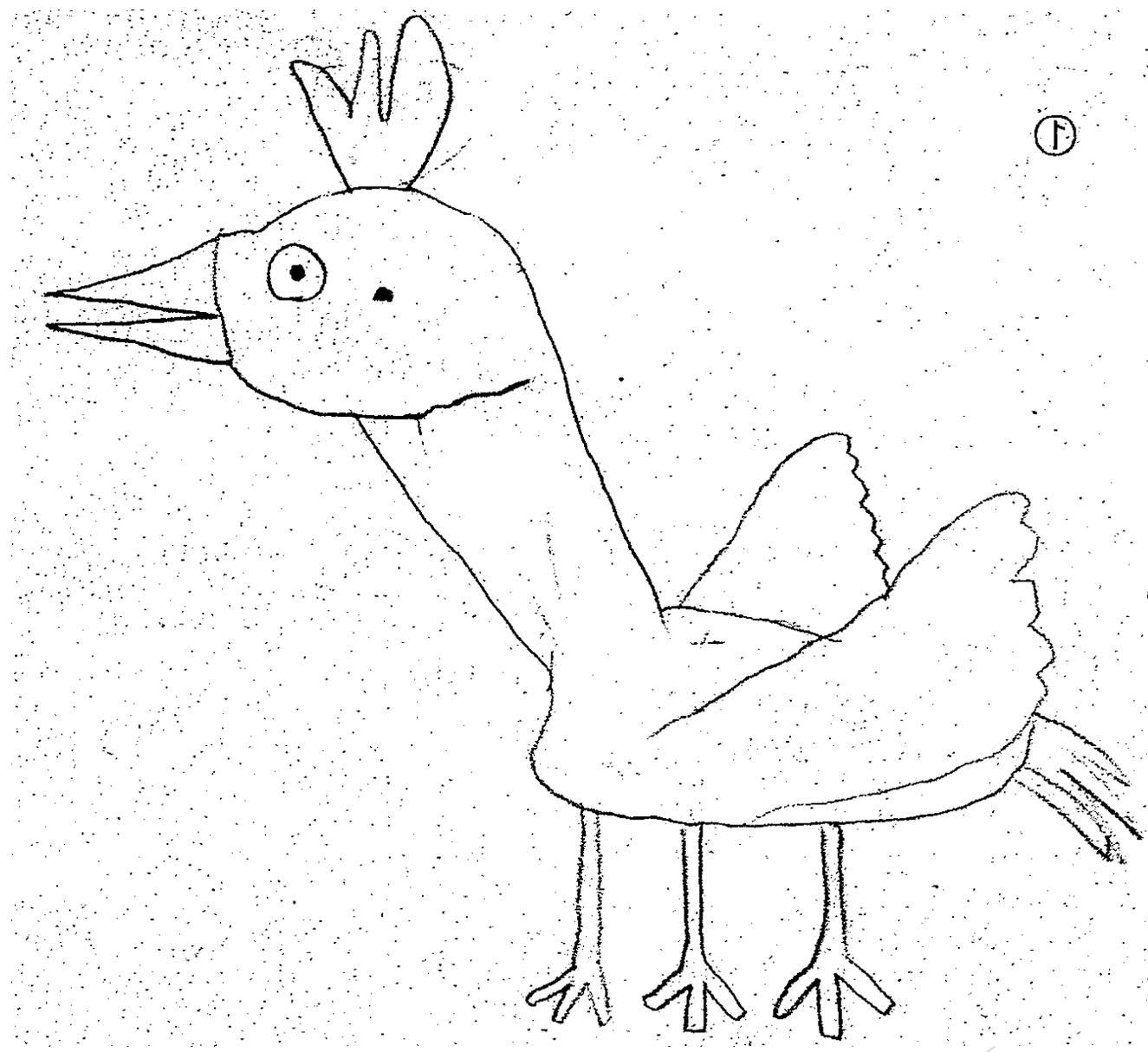
本紙「きよりの言葉」で、教育学者の佐藤幸也さんが「四本足の鶏を平気で描く消費者の蔓延」を憂いでいた▼知ってはいたが、実際にその絵を見たら、ちよつとショックを受けた。首

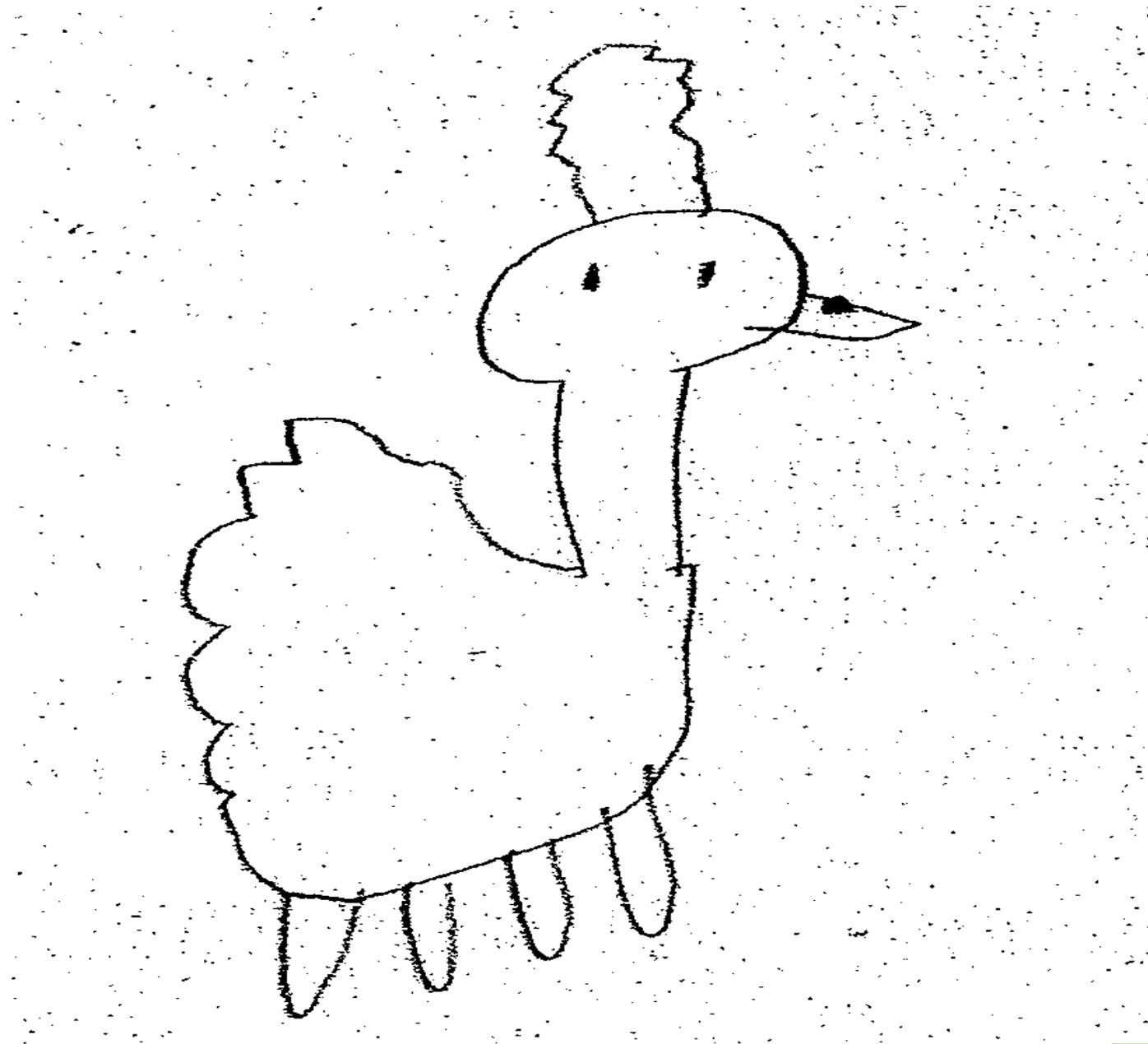
都圏の高校で毎年、生物の授業の一環で生徒に鶏の絵を描かせている教諭がいる。了解を得て見せてもらった。さて、ここで問題。1クラス38人中、鶏を正しく描けなかった生徒は何人いたでしょうか▼正解は6人。うち4人は見事な4本足。2人は鶏の頭だけだったり、頭は鶏で首から下が人間だったり。この試みは10年ほど前から始めた。鶏を正しく描けない東大生がいると知ったのがきっかけ。「毎年、一定の割合で4本足を描く生徒がいる。最高で6本足がいた」とか▼毎日のように食べている卵や鶏肉。だが鶏の足が何本あって、どう飼育され、卵や肉になるのか、分からない子どもが育つ。福岡県北九州市では砂防ダムに落ちたイノシシに「かわいそう」という声がか殺到、やむなく行政が救出した。命の現場から離れば離れるほど理解は乏しくなる▼千葉県旭市の養鶏農家、大松秀雄さんは言う。「子どもたちが悪いわけではない。学力や効率を優先し、自然をベースにした教育を組み立ててこなかったのが問題」と。偏差値アップより大切な学びはある。

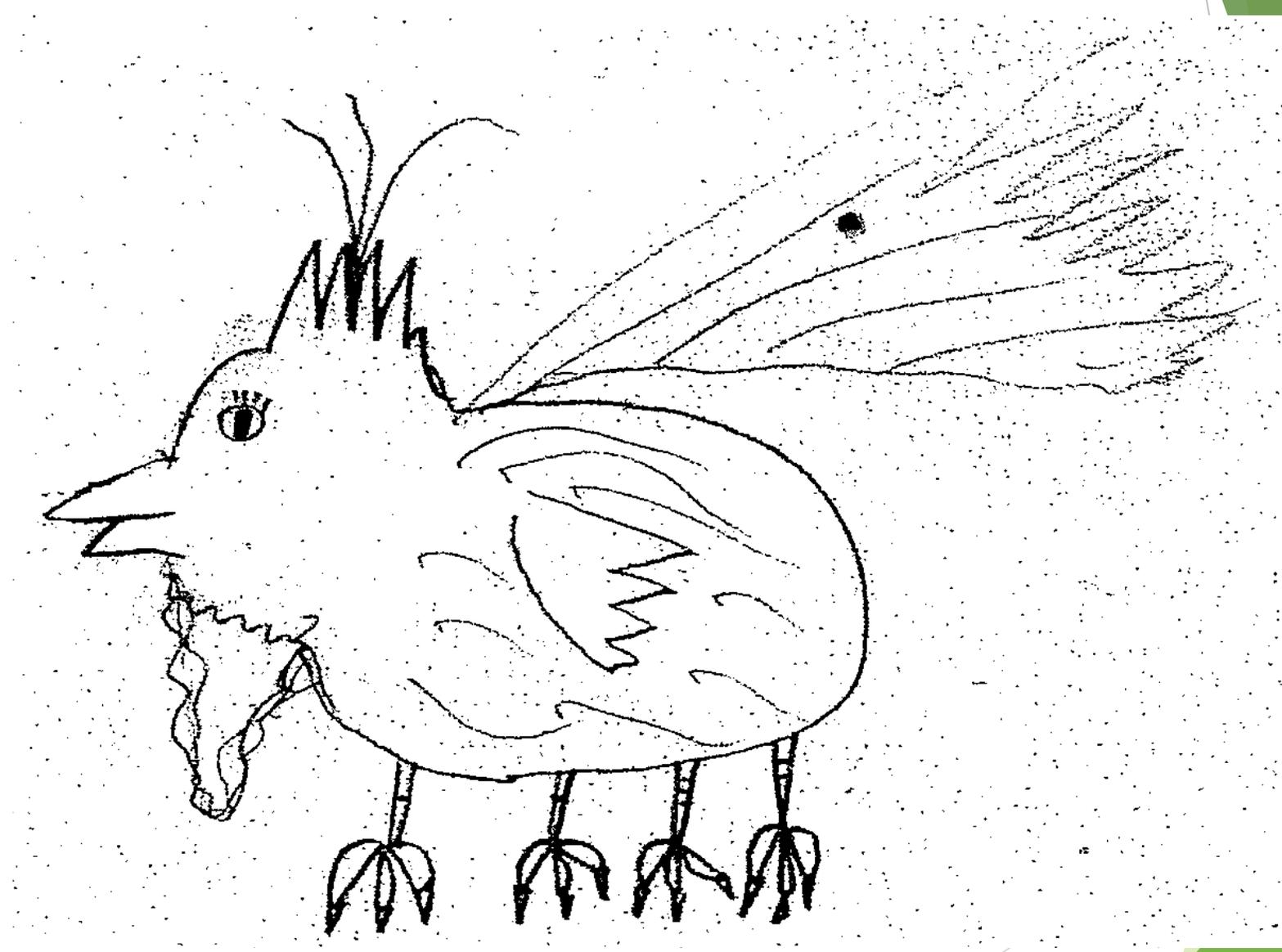
この「四季」が生まれた背景

- ・ 夫（60歳）は高校生物の教員をしている。
きっかけは、東大生でも鶏を正しく書けない子がいる、というレポートを読んで衝撃を受けたこと。20年前から新高校一年生の生徒たちに、いきなり紙を配って鶏の絵を描かせている。
- ・ 去年は
196人中、36人が3～6本足に。

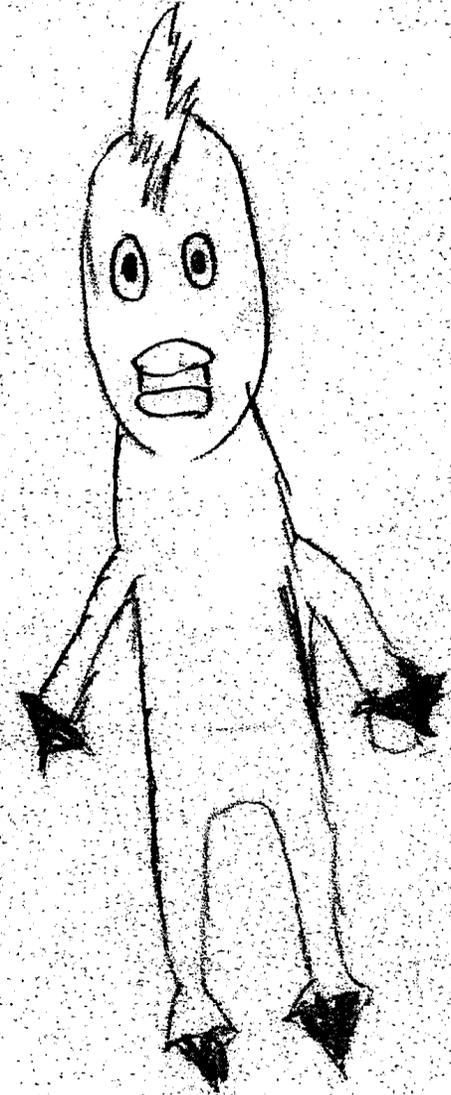
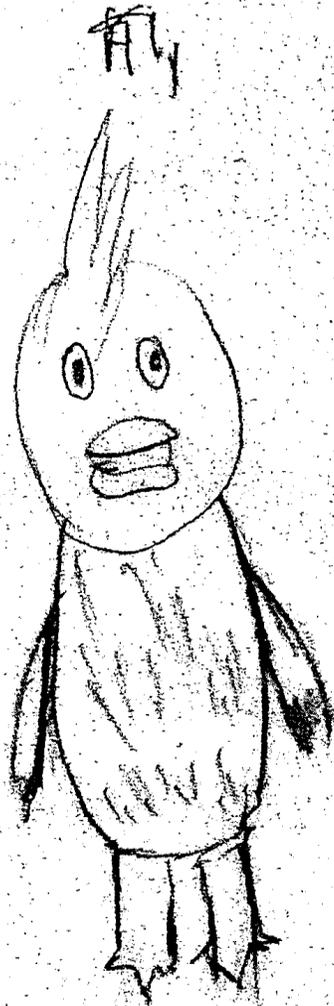








①

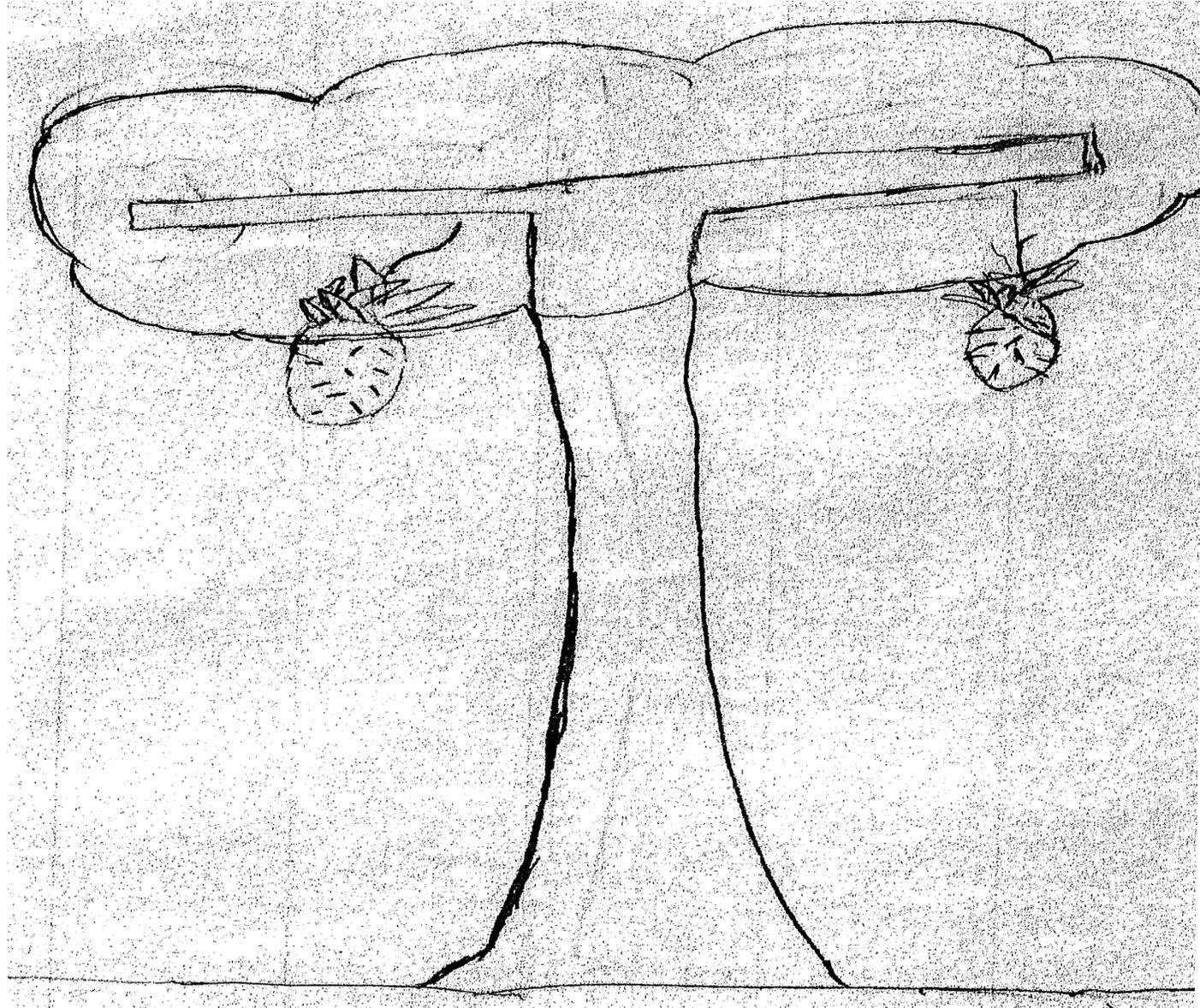


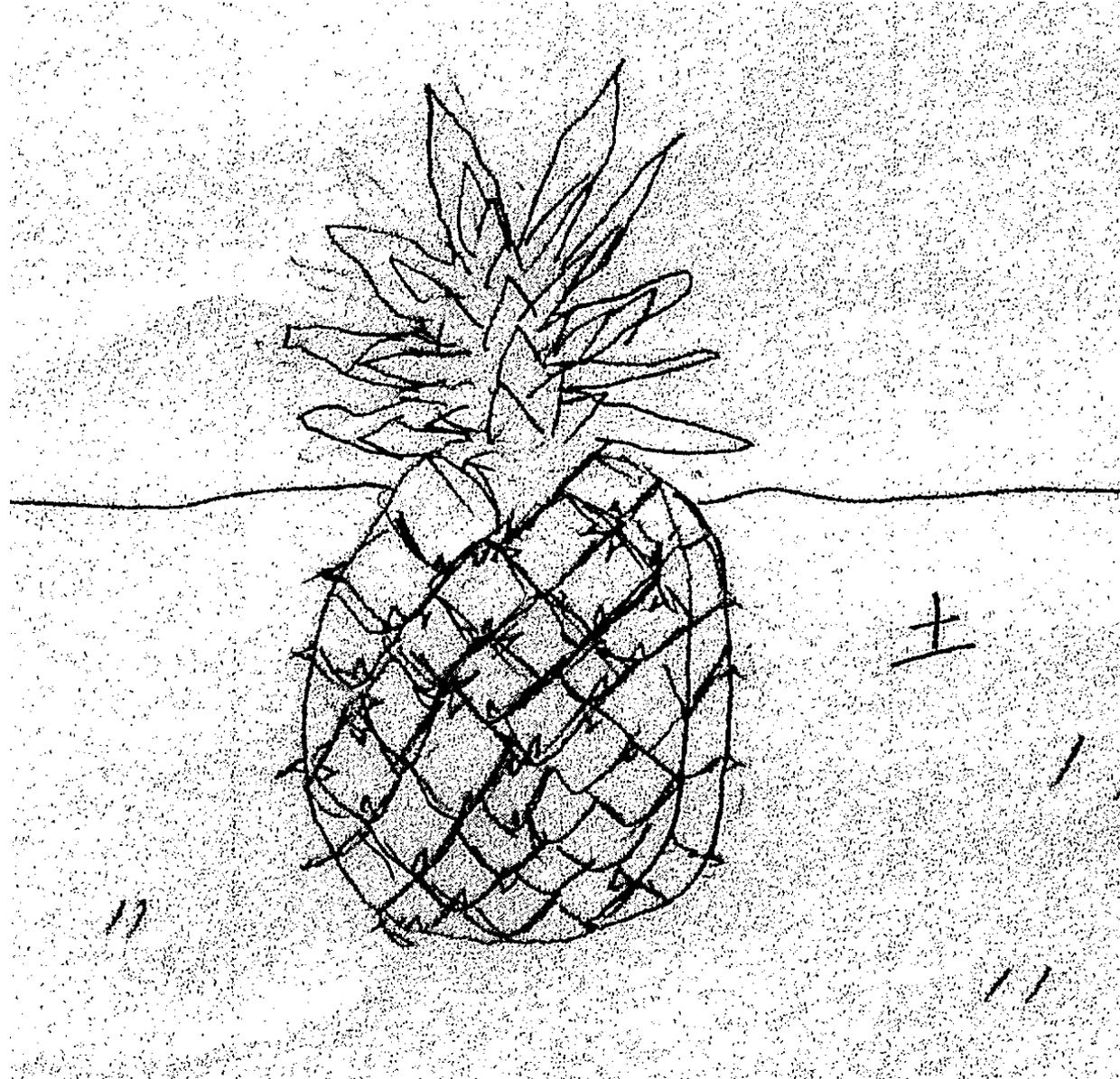
今年は「パイナップル」に決定

▶ なんでパイナップルか？

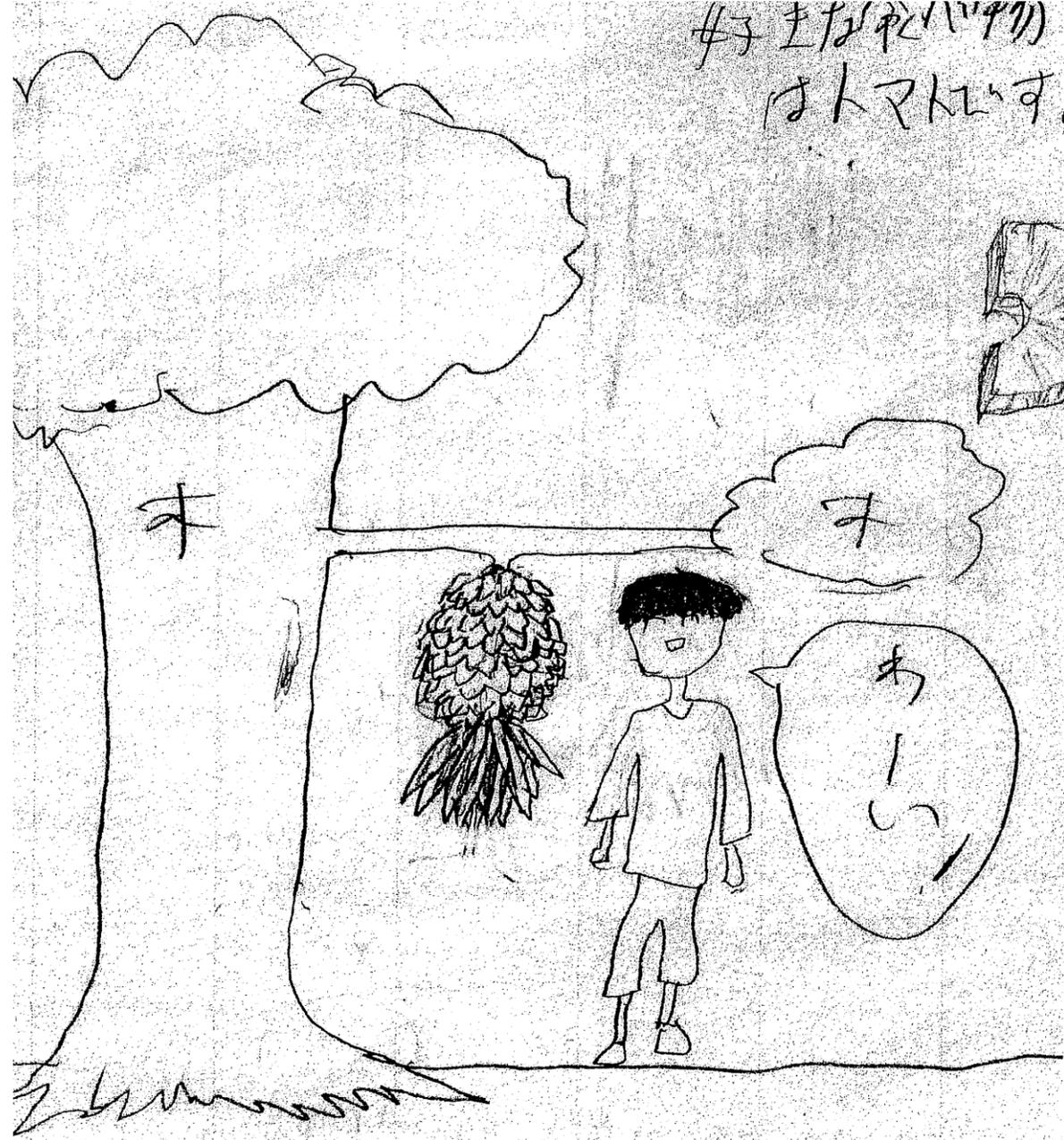
夫いわく「いま、スマホがあれば、なんでも調べられる時代でしょ？ 興味があればどうやって生えているかはわかるはず」

・今年の高校2年生へのお題は「パイナップルはどうやって時生えているのでしょうか」。
→正しく描けた生徒は49人中2人（甘くみて）。





#子主は松(ハヤシ)物
はトマヒス。



鶏の足、パイナップルの絵の総括

- ・フルーツパフェ、タピオカ、パンケーキが好きでも、「食そのもの」「食べられるお店」に興味はあるが、どうやってそれが作られているのか、原材料の産地はどこか、誰がどうやって作っているかにまで興味、関心がない。

→おいしかったら、それでよくね♪。テレビでは「かわいい」「うまい」「おいしい」の連呼。

- ・食から農、作り手に関心が及ばない現実。

横展開したい「命の教育」

豚と共に4カ月半 飼育・出荷・給食で口に

悲しいけれど、ありがとう……。長野県の伊那市立伊那小学校4年文組39人は、総合的な学習で飼育した豚を出荷し、給食で食べるまでの授業を経験した。出荷の日には児童と親、担任教師が見送った。泣きだす児童もいて、川上達磨教諭は「生き物を育てることの大変さと、食のありがたみを感じる貴重な授業となった」と語った。

長野 伊那小4年の39人

農家やJA協力

給食での残食が課題だったクラスでは、食の大切さを学ぼうと、ホウレンソウ農家を訪問。農家の思いや栽培の大変さを学習した。今回は4月に社会科で日本の特産品について学んだ際、児童から「豚を飼って食べてみたい」と意見があり、話し合いを重ねた。クラスでは、富田村で養豚を営むウエムラファーム・植村英さんの協力を得て、2021年9月から出荷に向けて飼育を始めた。飼育は、JA上伊那普農経済部畜産課の木崎章夫係長が指導。児童は衛生や防疫の注意点、飼いや方などを学んだ。出荷まで毎日、児童が当番制で世話を担当。教室の中や外には、豚の飼いや肉の部位についてまとめた紙や日々の様子を収めた

悲しいけれど――



ありがとう

た写真を掲示。豚の似顔絵を壁に飾り、豚のいる生活を送った。

別れ惜しみつつ

児童の多くが出荷をためらい出荷時期を過ぎる中、再度話し合った。「いつか出荷しなければいけない。それなら最後まで責任を持って見届けよう」「出荷するなら、おいしく食べて体の一部にしたい」という声も上がり出荷を決意した。

出荷当日、JA中小畜産部会が児童全員に修了証を授与。4カ月半を共に過ごした豚との別れを惜しみつつ、児童全員で軽トラックに豚を誘導。目に涙を浮かべながら軽トラックを見送った。

涙拭って味わい

出荷された豚は当日と畜。約1週間後、給食センターで調理されたクラス全員で食べた。「豚の塩焼き」を前に泣く児童もいたが、一人は「悲しいけど『ありがとう』の気持ちでいっぱい」と話した。

川上教諭は「飼育していきうちに、クラスの1員、という思いが強くなった。涙を流す子を見て、改めて一生懸命育てたのだと実感した。同時に、悲しい思いをさせてしまったことには考えるところもある」と、言葉を詰まらせながら語った。

(長野・上伊那)



写真左：別れを惜しみ豚と触れ合う児童
同右：給食で「豚の塩焼き」を前にする児童。涙を拭く姿も見られた（いずれも長野県伊那市で）

賛否が分かれた「命の教育」

教諭側「児童に悲しい思いをさせてしまった」

記事はヤフーニュースに配信され、全国から賛否の声も

「あまりにも残酷。トラウマになる」「小学生には早すぎる」

「食べ物を粗末にしないという根底にある大事な教育」など。

→正解がない、それが正解かも。

命の授業

しなやかな感性育もう

悲観的にながちな今の社会「どーありがどう」。写真にまっただ中には考えるどころ
会情勢の中で、体験を通しては、給食の豚肉の塩焼きを前もある」と振り返った。
食と農、命を学ぶ子どもたちに涙を拭う子どもの姿があっ 記事はヤフーニュースにも
はた、まして、大切なのは、た、こんなに重い「いただき 配信され、読者のコメントは
感性の柔らかい時期に命を学 ます」は、きくと初めてだっ 賛否が分かれた。「かわいが
ぶ場をいっぺん。他者へ たたき、複数の読者から って育てた子にとって結果は
の思いやり、想像力を身に付 「泣けた」と声が寄せられた。 あまりに残酷。トラウマ(心
けた子どもたちには、未来を 命を扱う授業だけに、思っ 的外傷)になる。「大人でも
切り開く力が宿る。 悩む担任教諭の言葉も印象深 きつい体験。小学生には早過

日本農業新聞では3月、長 い。「飼育してぐらうちに きる」など否定的な意見や、
野島伊那市立伊那小学校文組 (豚が) グラスの「員」と「食」物を粗末にしないとい
の「豚の授業」の記事を掲載 いう思いが強くなった。涙を うこの根底にある大事な教 訪ね、農家の思いや栽培の苦
した。児童が養豚農家に教わ 流す子を見て、改めて「生懸 育」「当たり前」に食べている ろ、児童から「豚を飼って食
りながら豚を飼育して出荷、 命育てたのだなど実感した」 肉の背景を知ること大事」 べてみたい」との声が上
食べるまでを体験するもの と川上達磨教諭。一方で「同 など賛成の声もあった。 り、命の授業が始動した。
だ。タイトルは「悲しいけれ 時に、悲しい思いをさせてし 取材を続けてきたJA上伊 注目したいのは、各段階で

子どもたちが自身が話し合い決
めていることだ。豚を飼う中
で出荷をためらう意見が増え
たと、きも話し合い「責任を持
って見届けよう」と出荷を決
めた。決して大人による、押
し付けの授業ではない。
全国で多くのJAが食農教
育に取り組んでいる。活動の
育に取組んでいる。活動の
中に、農家を講師にした「命
の授業」も盛り込んでみては
どうかろう。家畜だけでなく
家畜だけでなく、

種にも苗にも命がある。植え
る、児童から「豚を飼って食
べてみたい」との声が上
り、命の授業が始動した。
注目したいのは、各段階で
子どもと、「命の循環」を
学ぶのにふさわしい。

2022・5・29

注目したい「乳幼児栄養調査」

- ▶ 厚生労働省が10年に一度、調査するもの。
→ 着目したいのは「社会的経済要因に関する状況」調査。

富裕層（ゆとりあり）、貧困層（ゆとりなし）の食卓に上る食材にどのような変化があるのかを調べたもので、有意差がみられた項目は多かった。

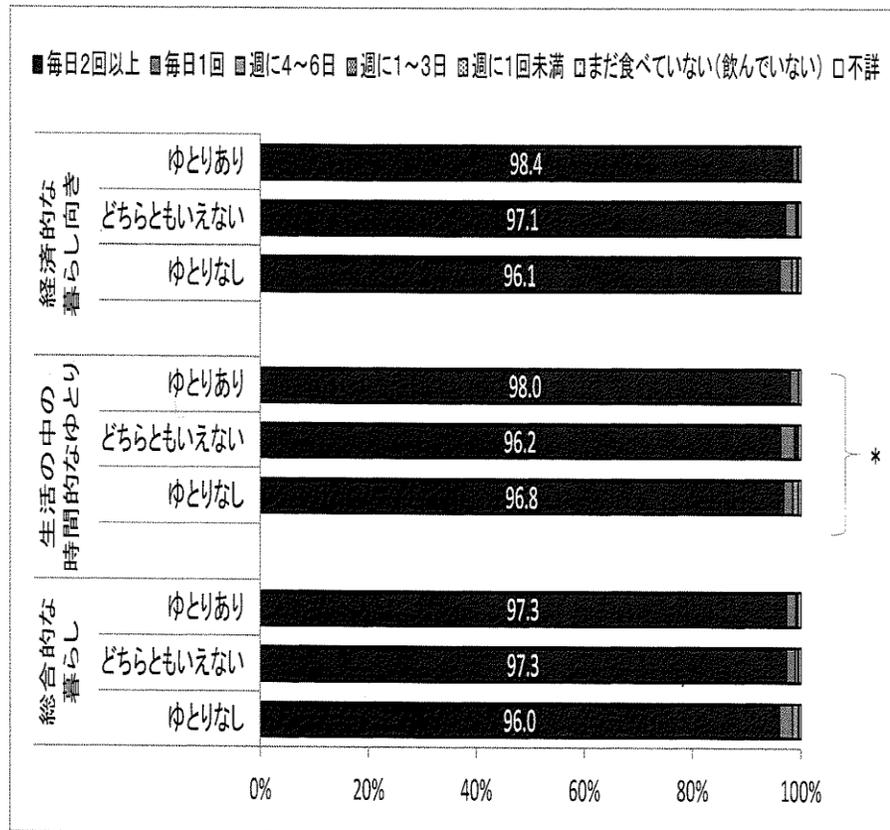
最新が2015年度なので、貧富の差がさらに拡大しつつある現在においては、この傾向はさらに顕著になっている可能性も。

経済格差は、食べ方にもろに影響する

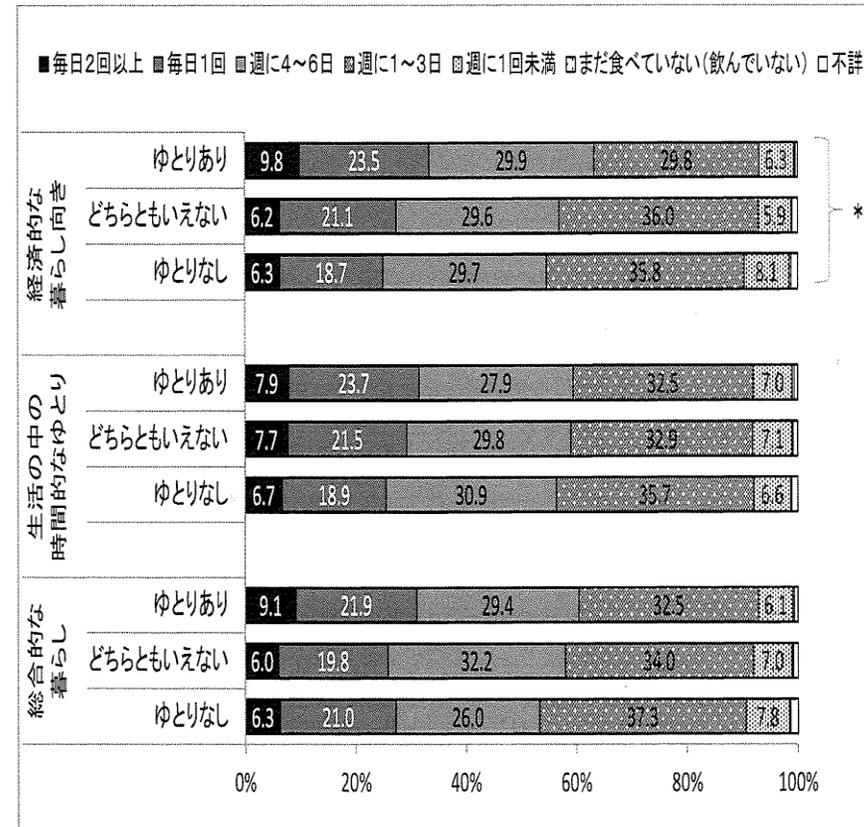
図39 社会経済的要因別 主要食物の摂取頻度 (回答者：2～6歳児の保護者)

* : カイ2乗検定を行い、P値<0.05

①穀類 (ごはん、パンなど)

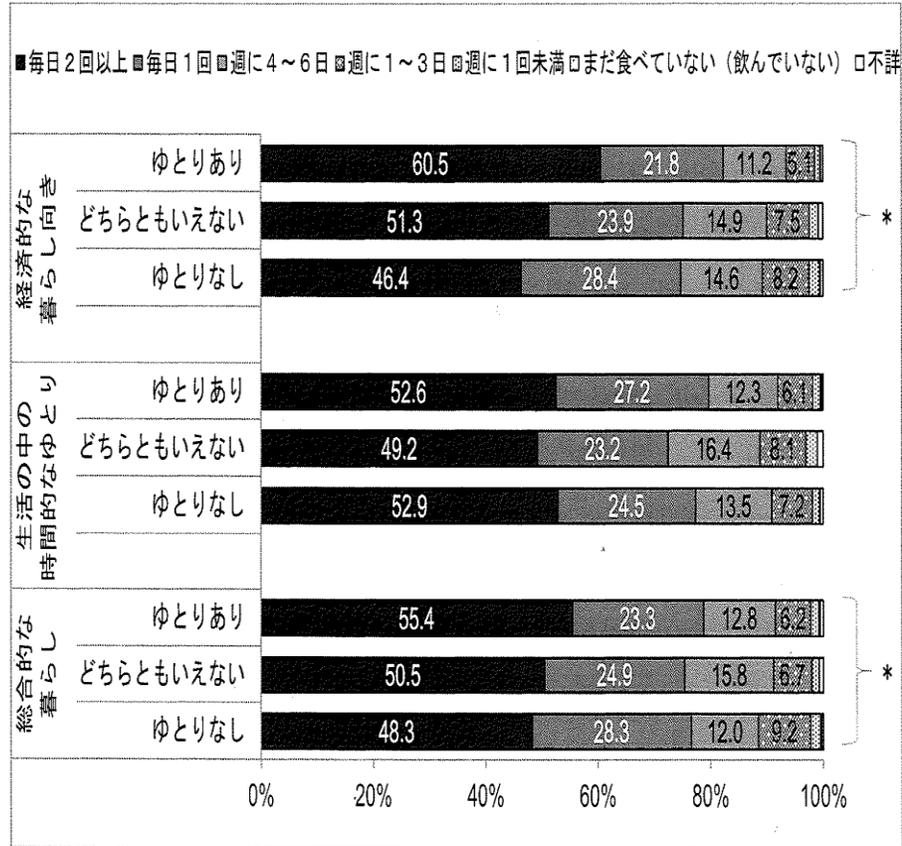


⑤大豆・大豆製品

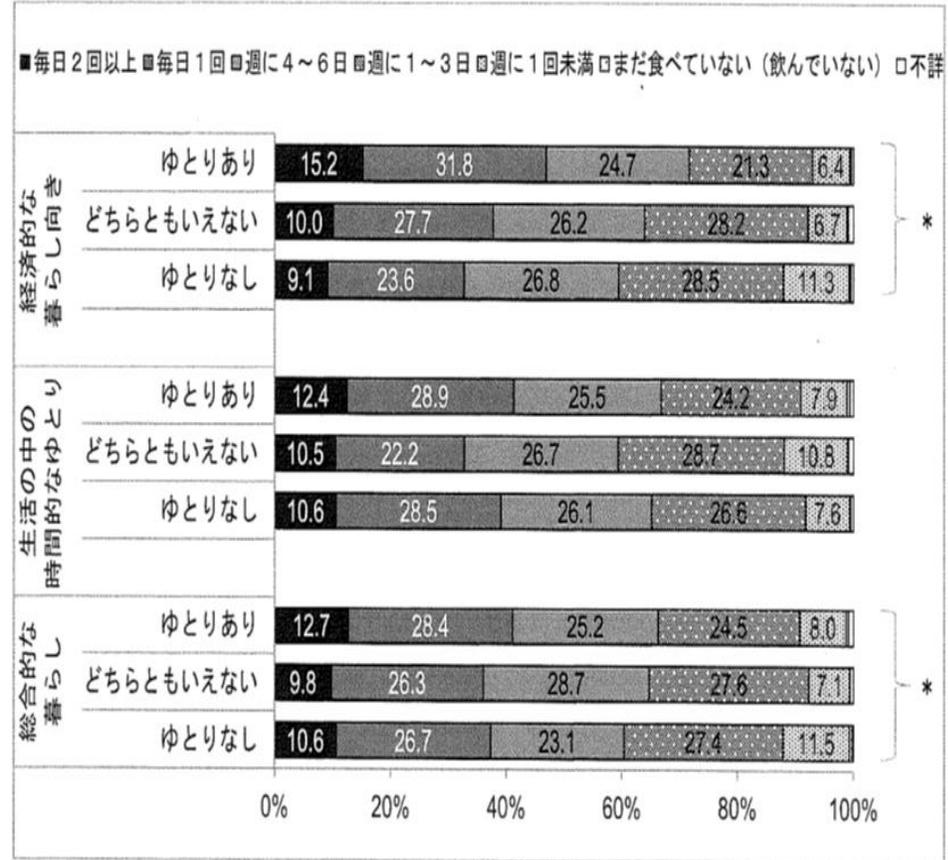


ゆとりなしは野菜・果物は食べられない

⑥野菜

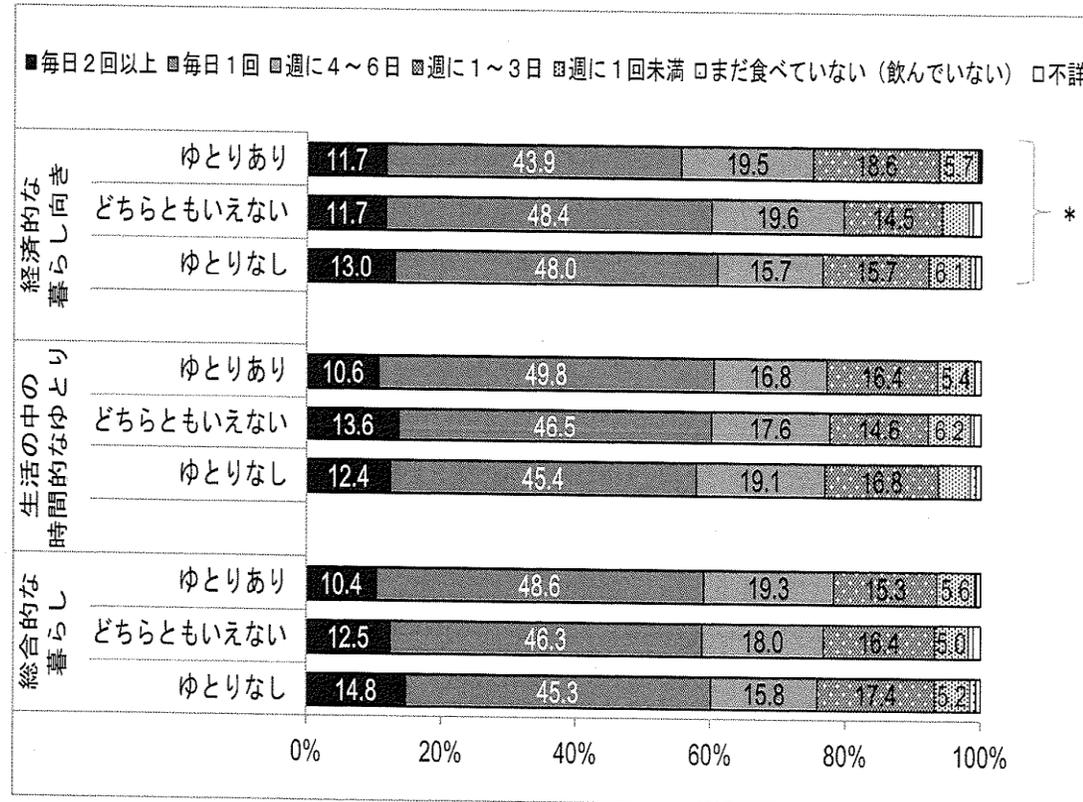


⑦果物

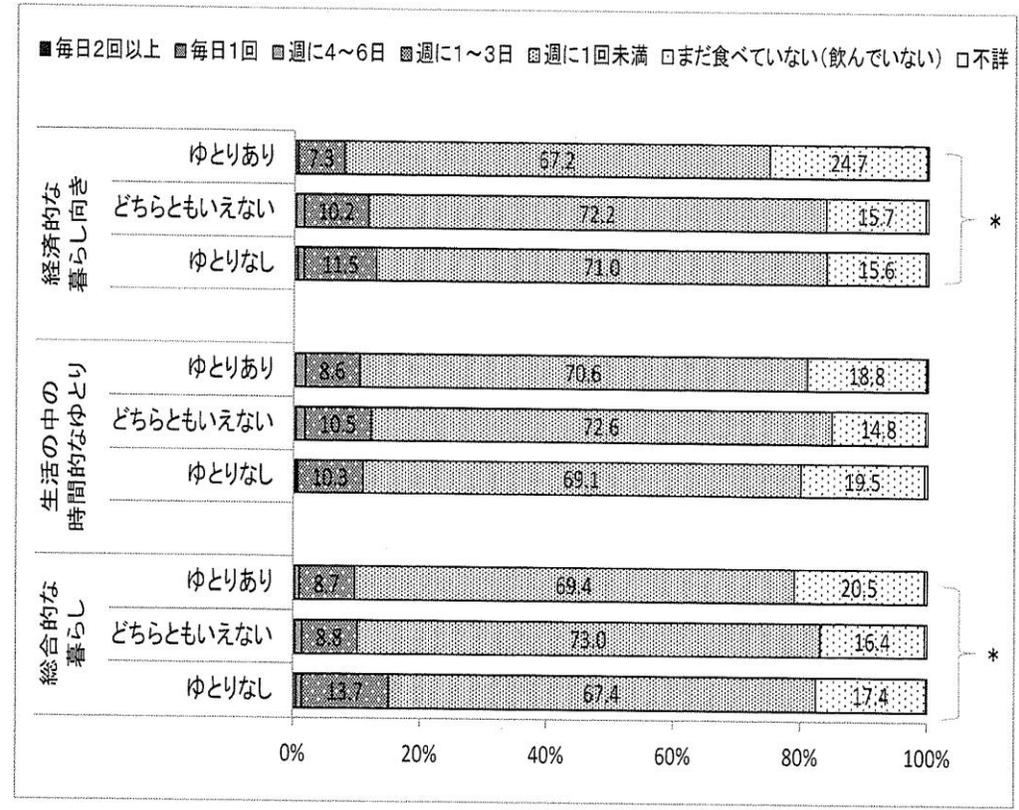


ゆとりなしほど菓子パンとカップめん

⑪菓子（菓子パンを含む）



⑫インスタントラーメンやカップ麺



人が育つ条件とは。

「子どもを育てること＝心を込めた手作りに他ならず、大変手間のかかることです。その手間を省いて便利で楽な子育てが流行しているところに、今日の子育ての非常に大きな問題があります」

（「人が育つ条件」 広木克行）

- ▶ 子どもに早期教育をさせる→優秀な成績をとらせる→進学校に行かせる→いい大学に進ませる→大手企業に入らせる→エリートにさせる→結婚させて、いい家に住ませる→それで本人は幸せなのか、豊かなのか？
それで自分らしい生き方ができるのか？

果たして、今もこの公式は成り立つのか。

本当の自分になるために。

「促成栽培的な子育てを商売にしている教育産業は、子どものことを思って一生懸命な親たちをねらって、次々と教育カリキュラムを開発しています。（中略）人間の子どもたちに必要なのは、仲間と遊ぶことなのです。そのためにこそ、子どもたちの回りには泥があって、水があって、砂があって、そして木や草がある。そんな自然の環境が必要なのだと思います」（広木氏）

→農業には、子どもが育つすべての「装置」がそろっています。

命を育む農業は、混沌とした時代を「生き抜くたくましい力」を育み、自己肯定感を高めるのではないのでしょうか。

土に根差した J A の食農「共育」 = 可能性は無限大

瞬間チャージ、ながら食べ、ファストフード・・・

「現代の食事はあまりにも、車の給油に近いあり方に变化しつつあります」→食も農もあり方を考え直す時。

(藤原辰史『戦争と農業』)

環境に負荷をかける大量生産、大量消費、大量廃棄を見直し、
→適正に作り、まずは地域で分かち合い、未長く続く産地へ。

他者との競争ではなく協奏、共創。

→上から下への関係ではなく、フラットな関係性の構築。

農を介して親も子も共に育つ「共育」が大事ではないか。

手間を省く知恵。手間をいとわず、楽しむ心根。どちらも大切。
(木更津社会館保育部・宮崎栄樹園長)



里山の力!

木更津社会館の取り組み



写真と文 岡本央

江戸川下流に広がる、その「あじさい畑」の風景は、近年注目を集めている。あじさい畑には、あじさいだけでなく、さまざまな種類の野菜が栽培されている。このあじさい畑は、木更津社会館の取り組みの一つで、地域の活性化と、食の安全・安心の確保を目的としている。あじさい畑の運営は、社会館の職員と、地域のボランティアが協力して行っている。あじさい畑の収穫は、社会館の食堂や、地域の福祉施設などで消費されている。あじさい畑の取り組みは、地域の活性化と、食の安全・安心の確保に貢献している。

エダマメ

不便は「気づき」の宝庫

見えない構造を見抜く快感。9歳までに「目」が発見すべき一生ものの才能。
(木更津社会館保育部園・宮崎栄樹園長)



人力農具

眺めるだけで新発見

里山の力!

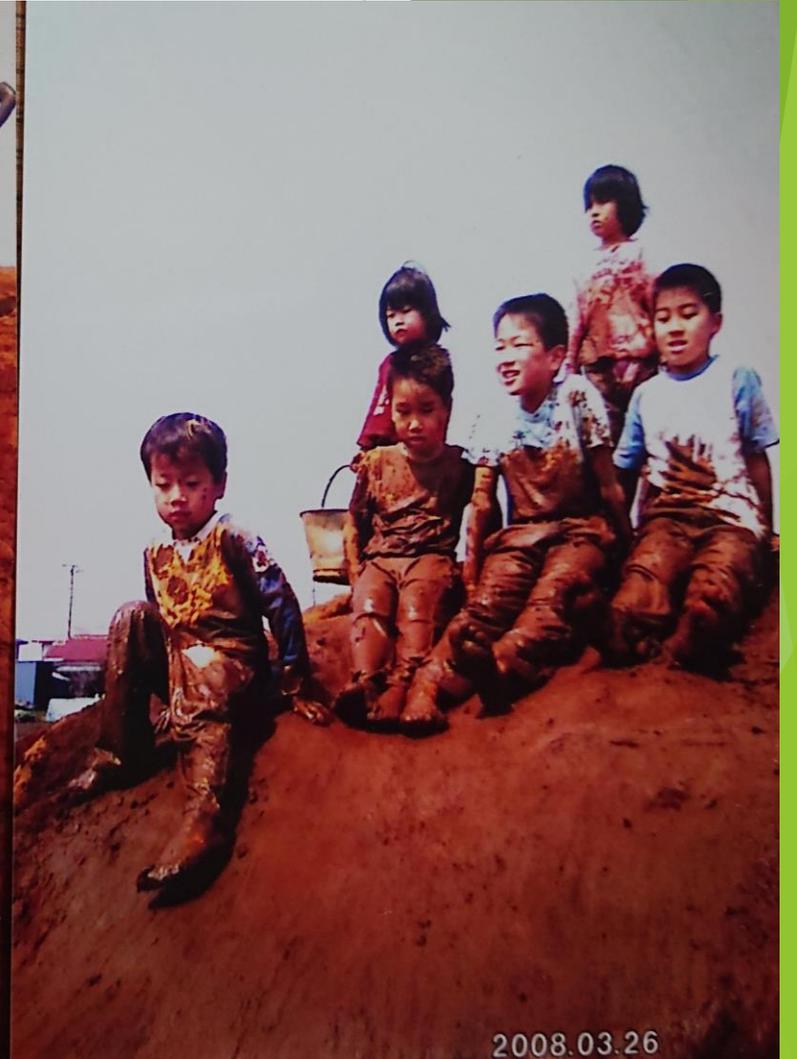
木更津社会館の取り組み



写真と文 岡本央

里山学校の活動を通して、地域の活性化と、食の安全・安心の確保を目的としている。あじさい畑の運営は、社会館の職員と、地域のボランティアが協力して行っている。あじさい畑の収穫は、社会館の食堂や、地域の福祉施設などで消費されている。あじさい畑の取り組みは、地域の活性化と、食の安全・安心の確保に貢献している。

土、太陽、水の教育力。



JAだからできること。

▶ 食と農業の架け橋として

- ①農業体験の提供、どろんこ体験の提供（これまで通り）
- ②直売所に併設した食堂があれば、そこで月1回でもいいので、JA版「子ども食堂」ができないか。
- ③残った野菜を、廃棄することなく、貧困家庭の子どもたちに分かち合える仕組みをつくれないうか。

→JAのファンになってくれる可能性大。「JAがあって助かった」「ありがとう、JA」。JAの見方が変わり、味方が増える。地域に開かれたJAへ。

ご清聴ありがとうございました！

(記事や図、写真の無断複製転載を禁じます)